

2020年1月2日

蜘蛛の糸 — 深水埗に見る夢と現実



人々を動かすものが夢だとしたら、現実とはその体をからめとる蜘蛛の糸なのだろう。

期待に反し、その宿では抗議活動の情報を十分に集められないようだ。舞踏家の彼女が教えてくれた抗議派の経営者の所有する宿に移ることにした。場所はホイチュウのアトリエのある石硃尾（シェッキップメイ）近くの深水埗（シャムスイポー）だ。香港の下町、香港の秋葉原とも言われる街。『転がる香港に苔はつかない』の著者、星野博美氏が香港の物件をめぐって辿り着いた場所、絢爛さよりも人々の息遣いを、虚栄よりも這いつくばるような力強さを希求する氏の選んだ街なのだから、香港市民の生活を感じられる場所に違いない。

地下鉄の駅を降りると雑多な人込みにひるむが、そこは尖沙咀とは雰囲気を異にする。雑踏の中にも牧歌的な空気が漂っている。

一月とは思えないような眩しい日差しは、ここ香港が沖縄や台北よりも南に位置することを思い出させる。歩いているなかでふと目を落とした場所、店の軒先に置かれた段ボール箱にかけられた麻布の下に何かが動いた。驚いて店を見ると、蛇料理を出す食堂のようだ。麻布の下にいるのはどうやら、調理されるのを待つ生きた蛇のようだ。店主らしき男性。その脇の水槽には、蛇が生きている。よくみると店先に多数の蛇皮が干してある。目を丸くして眺めていると店主が話しかけてくれる。三〇年以上前、香港返還よりもずっと前に中国から移民として来たのだという。



かつて深水埗一帯は、その名にあるように深い湾であったらしい。「艇屋」と呼ばれる船に住む人々に溢れていたそうだ。艇屋やブラック。中国本土から来た多数の移民が集まるのが、この街だったらしい。

かつて中国人にとっても憧れの地であった香港。その香港が中国に取り込まれつつある。圧倒的な国力を持つに至った中国にとって香港はもはや憧れの地ではなく、搾取先に過ぎないのか。中国はこの20年以上、一国二制度としながら香港を利用してきました。中国本土とは異なる貿易条件を持つ香港を使えば二枚舌的な外交が可能となる。この条件下で最大限その便益を享受するために発展してきた都市が、香港と中国の境界に位置する深圳だ。深圳は香港から地下鉄でも一、二時間で到着する。深水埗を拠点として、明日は深圳にも足を運ぼう。

その宿に着くと、想像以上に洗練された場所であることに驚く。深水埗は下町であるとともに、アート志向の強い街でもある。混沌とした街並みの隙間に洗練されたカフェが点在し、それが独特の雰囲気を作っている。それはJCCACが近くにあることも関係があるよう思われた。宿のオーナーは若い女性。舞踏家の彼女はかつてこの宿で舞踏のパフォーマンスイベントに出たことがあるのだという。そんな縁で、私にこの宿を紹介してくれたことになる。

抗議活動の片鱗は、壁に無造作に貼られたポスターに見ることもできる。そこにあるのは悲壮感ではなくポップ、シリアルスではなくクールさだ。





自分が泊まるドミトリーの部屋に案内してもらうと、面食らった。カプセルホテルのような構造だが、すべての壁が鉄格子になっている。

「ここは、この本にインスピアイアされたの。」

そう言って渡された写真集を開くと、籠のような小部屋に住む人々の姿が写っていた。ケージハウスと呼ばれるその形態の住居での生活。そこにあるのはデザインされたこの宿とは違って、生活感に満たされた力強い写真だった。狭い土地、高い家賃。厳しい住宅事情におかれた香港で生まれた、最底辺の住環境。

一般財団法人日本不動産研究所の調査によれば、香港の住宅価格は東京の二倍以上。50平米の古いマンションが6000万円もするという。夢を持って集まつた人々が、ケージハウスの安さ故に、束の間の居のつもりで住み始めるものの、いつしかそれは長引き、いつの間にか捉えられてしまう。重なる格子はそんな蜘蛛の巣のようにも見えてくる。資本主義の片隅にひっそりと佇む、蜘蛛の巣。

全ての人が尊重されるべきではあるのに、需要と供給で成り立つ資本主義社会の中では自然な帰結として一部の人々の人格が蔑ろにされている。時には本人も気付かないうちにその糸に絡めとられてしまうのだ。ここは仮の宿。いつでもここを離れて飛び立つことは出来るのだけれど、今はその時じゃない。そういうって、静かに糸の中に身を沈めていく。旅の地で自分が見たものは自分の姿なのかも知れない。

コップから溢れた嵐 — 革命と統制

ドイツにいる友人からメッセージが届く。

「香港のデモでメッシュネットワークが使われているという記事を見つけた。香港の連中はクールだね。」

メッシュネットワーク。それは、携帯電話等の基地局を介さずに、利用者のスマホ等の端末同士を繋ぎ、それらの数珠つなぎになった通信経路を介して通信を行う技術だ。なるほどと納得する。昨日のデモにあったとおり、デモ活動においてとてつもない規模の人々が集まった時に、基地局を介する通常の通信経路はパンクする。まさに私はそれを体験していた。そして、権力の手が届かない民衆の所有物のみを使って通信をするという発想は、通信傍受と回避するという観点からも有用そうだ。香港の連中はクール。その通りだと思う。

ITは現代の抗議活動を支える基盤となっている。掲示板LIHKG、redditをはじめ、多数の情報共有手段が提供されている。

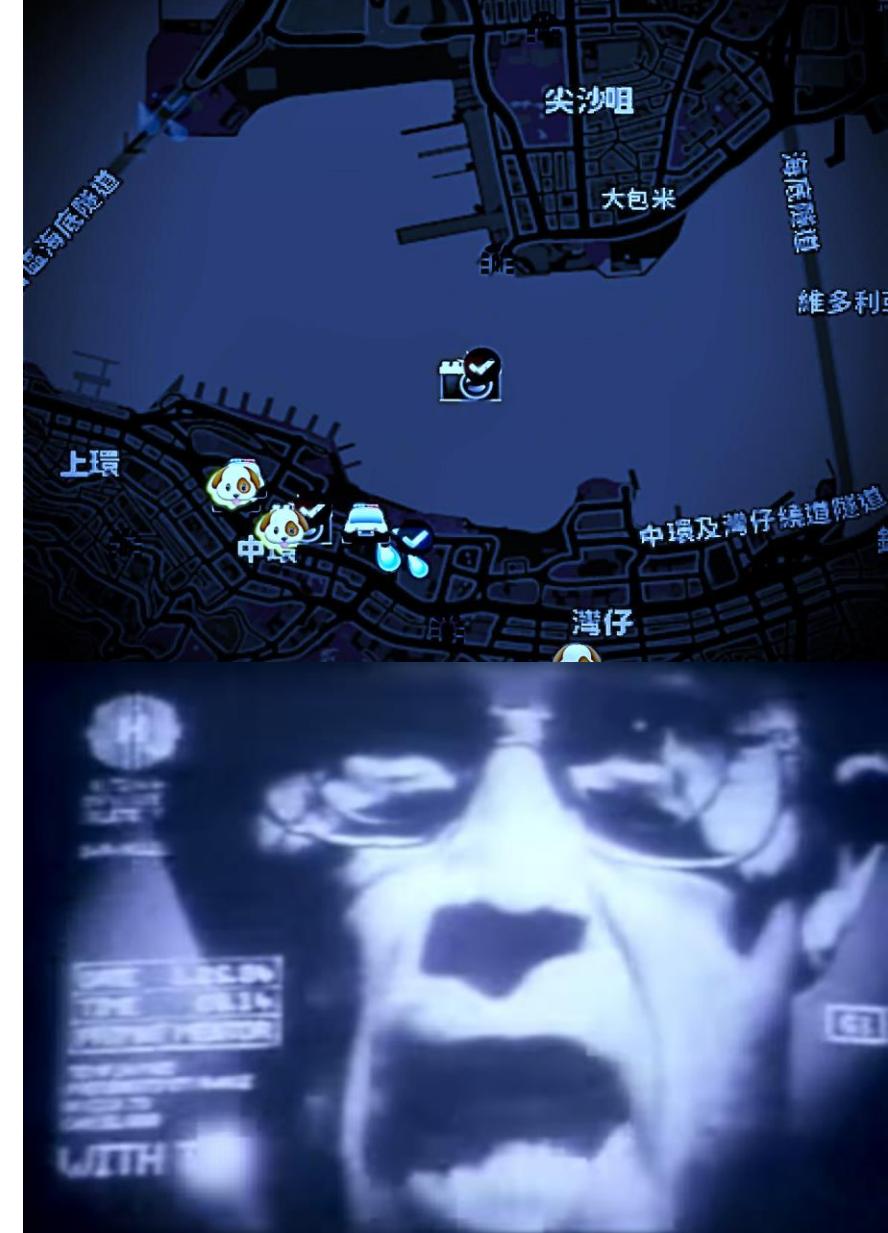
抗議活動や、警察の動向をリアルタイムに共有するHKmap。それは抗議活動に際し、市民の手によって開発された。Apple社のCEO、ティム・クックは社員に向けて以下のような見解を示し、HKmapのApp Storeでの公開を承認しないことを告げている。

「技術は良いことにも悪いことにも使うことができます。今回、HKmap.liveが警官への襲撃や犯罪などに用いられているという信頼できる情報を受け取りました。こういったアプリは香港の法律に違反するものであり、広域な犯罪行為に利用されているという実態は、明白にApp Storeのポリシーに違反しています」

ログDarling Fireballを運営するジョン・グルーバーはブログ上で議論を展開した。Appleが独裁者に加担するような行為をするメリットは何かということについて、生産を中国に依存していること、そして、ヨーロッパ全土と同等規模という中国の市場を見据えた上での、中国政府の意向を踏まえたApple社の判断だろうと述べた。その上で、「広域な犯罪行為に利用されている実態の具体例」を回答するべきという声明を上げて追求の姿勢を見せた。疑惑の企業としてのApple。そこに凋落を見出すのか、露呈という言葉を当てはめるのか。

Appleはかつて、スティーブ・ジョブズのもと、自社イメージを監視社会に対抗する市民そのものだというイメージを前面にだしていた。監視社会を描いた、あまりにも有名な小説『1984年』、それが記された1949年当時の視点で、「近未来」である1984年の監視社会の姿を描いた。その監視主体は「ビッグ・ブラザー」と呼ばれ、人格すら見えない無機質な存在だ。Appleはまさにその1984年のTVコマーシャルで、ビッグ・ブラザーに反旗を翻す映像を作製し、放映した。

今やAppleは体制側に傾いてしまったのか。2016年、銃乱射事件の容疑者から押収したiPhoneのロック解除の要請を、FBIがApple社に要請したが、それに対してApple社は拒否すると大々的に宣伝した。これも穿った見方をすれば、後ろめたさを隠す行為の様にも見えてくる。つまりは欺瞞、そして茶番だ。スマートフォンはいつでも盗聴装置になり得る。その機会を利用すべく、国家レベルで介入しないことは、寧ろ米国の諜報組織NSAの怠慢ということにさえなってしまう。そんな言説も陰謀論としての一つの風説なのか。



On January 24th,
Apple Computer will introduce
Macintosh.
And you'll see why 1984
won't be like "1984"

HKmap（上段）を禁止したAppleは1984年のTVコマーシャルでは監視社会に対抗するイメージ戦略を掲げていた。



SNSの活用が注目されたアラブの春以来、抗議活動とインターネットは深い関係にある。

SNSが抗議活動を加速させた理由。それは、SNSが草の根の思想の拡散装置であるからだ。SNS普及以前、マスメディアが人々の思想を動かす原動力であった。人々はテレビの前に釘付けになり、新聞やテレビニュースこそが信頼に足る情報源であるとし、テレビコマーシャルに現れる商品こそが安心できるものだとして購買する。現代では、情報こそがパンであり葡萄酒である。マスメディアは信仰であり、テレビは情報を与える神の遣いであった。イエス・キリストは、最期の晚餐でパンと葡萄酒を、自らの身体そして血であると述べた。それは、人々の犠牲となるべく自らの命を差し出すということであったが、実際に宗教の与えるものは犠牲ではなく支配だった。

宗教の歴史は、権力の歴史だ。かつてより権力は大衆支配の手段として宗教を利用してきた。マスメディアが新しい宗教であれば、当然、権力もそれを利用する。中国、北朝鮮の国営放送、戦時下の日本の大本営発表を持ち出すまでもなく、日本にもメディアコントロールは依然存在する。閉塞した記者クラブ内での情報制限は権力によるコントロールを可能にしている。NGO「国境なき記者団」の発表による日本における報道自由度は2020年時点で188カ国中66位。G7の中では最下位である。

SNSがもたらす福音とは、メディアの解放だ。誰もが個人発のメディアを持ち、発言を拡げられる。フェイスブックは人の繋がりを軸にメディアとして成長し、twitterはリツィートによる情報伝播能力を軸に成長した。これらは、草の根の思想を拾い上げ、市民の声の形成を助ける

こととなった。その声は、時に政権を搖るがす程の重圧にまで膨れ上がった。

同様の手法は、2010年のチュニジアでの抗議活動にはじまり、アラブ世界に飛び火していった。総務省の調査によるとエジプト、イエメン、シリア等ほとんどのデモ活動がフェイスブックを活用していたとある。

その運動は中国にも届いていた。しかし、中国においては2011年にWeiboでの民主化運動の呼びかけが行われたものの、政府の鎮圧により失敗に終わっている。その要因は、中国政府の検閲速度が速かったことがあるという研究がある。

香港の抗議者達が使うメッセージングアプリtelegramは、ロシアで作られた。独自の暗号プロトコルを使っているため、当局の監視を受けにくい。今回の一連の抗議デモがピークを迎えた6月11日、telegramは何者から大規模なサイバー攻撃を受けた。DDoS攻撃

(Distributed Denial of Service、分散型サービス拒否攻撃)と呼ばれるその手法は、インターネット上の特定のサービスをめがけて無効な通信を送り込むことで、そのサービスの正常運用を阻害する攻撃だ。

telegramの発表によると攻撃元はほとんどが中国だったという。中国共産党は、2011年にサイバー部隊の存在を公式に認めている。その名称は「網絡藍軍」とされ、一部報道によると5万人以上のハッカーを擁しているという。2012年の報道では、中国政府は世界最大のハッカーのネットワークを擁しているとされ、世界で行われているサイバー攻撃の41%

が中国によるものとの統計が出ている。

ドイツの友人と語ったブロックチェーンSNSであるスカットルバットは、香港の人々の力になるのか。スカットルバットは中央サーバを持たない故に、検閲が困難である上に、DDoS攻撃に強い。抗議者と中国政府との闘いが、IT領域で深刻化してきた時にそれはきっと役に立つだろう。それは、中国政府の追加減に依る。彼らは常に準備している。それを妨げるものは、国境を跨ったサイバー攻撃に対する国際世論だが、特に香港ではその国境を成り立たせているものが一国二制度という欺瞞であるが故に、脆弱だ。つまりは、スカットルバットは未来の人々を繋げるために必要な手段なのだ。抗議者達はその必要性にいつ目覚めるのだろうか。

嫉妬と脱出 — 失われゆくもの

雑然とした深水埗の商店街の中で、何か食べたいと思っているときに見つけた行列。持ち帰りのできる軽食屋の様だ。店名は

『合益泰小食』とある。店内もほぼ満席だが、持ち帰りよりは長く並ばずに席につけそうだった。もちろん相席だ。店内に掲げられたメニューには英語表記もなく、発音も分らずにオーダーの際に戸惑っていると、隣に座っていた、おそらくは50歳代ぐらいであろう品の良さそうな中国系の女性が助けの手を差し伸べてくれた。

「日本人ね。この店は初めて？ここはこの『腸粉』が有名なの。注文を手伝ってあげる。」

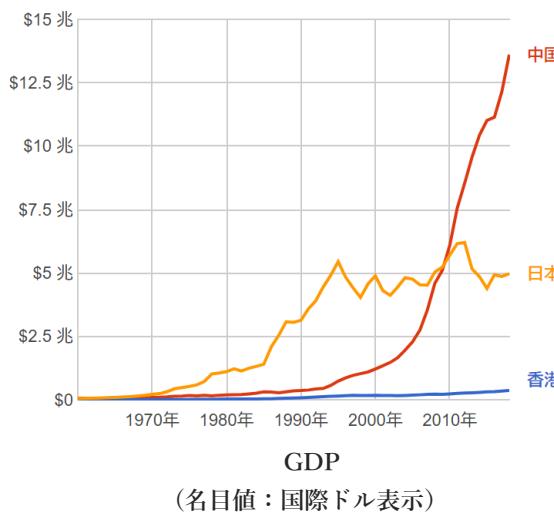
といって広東語で店員に話をしてくれた。お礼を言うと、最近はこの辺りも日本人は少ないみたいね、と話しかけてくれる。私

は23年ぶりに香港を訪れた旨を伝える。

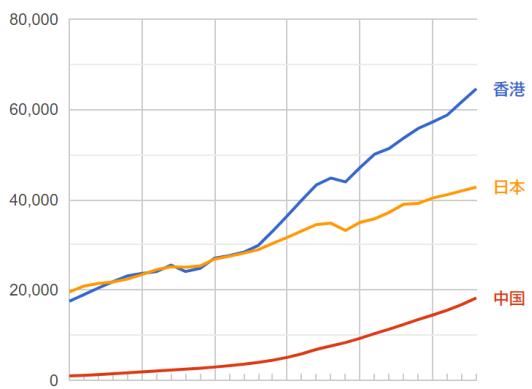
「23年は長いわね。その頃の香港と比べて、どの辺りが一番変わったと思う？」

一番の驚きは、街並みが意外に変わらなかったこと。私はそう伝えた上で、一番変わったと思うのは、香港の人々の考え方ですねと話した。23年前、香港の人達からは、今の様に社会に抗議するという発想がある様にはあまり感じられなかった、と。

当時の香港人の発想。社会は変わるもの、そこで与えられるものが気に食わなければ出ていけばいい。そう話すとある言葉に思い当たる。ドイツ人の友人と飲みながら話していた際に話題に出た共通の知人の話。この旅のきっかけとなった、ある中国人女性のインスタグラムに書かれた言葉だ。



GDP
(名目値：国際ドル表示)



一人あたりのGDP、PPP
(名目値：国際ドル表示)

「そうね。当時の香港の人々は、返還される前に香港を離れるべきだと思っていたのは確か。私もそうなの。私は香港の返還にあたって、カナダに移住したのよ。」

その女性は、現在、カナダでジュエリーデザイナーをしているとのこと。今も深水埗に住む母親の体調が思わしくなく一時的に帰国しているとのことだ。

カナダ等への永住権を得るためにには当時6000万円以上の費用が必要だと言われていた。永住ビザ取得のために不動産購入等の投資が求められるからだ。一般的日本人の感覚ではそれは、庶民が諦める類の金額であるが、香港の人々にとってはそうではなかった。香港を脱出するために、庶民であっても一部の人々は物凄い努力をしたらしい。それこそ昼夜を問わず、休日も含めて働き、移住のための6000万円を貯めるのだ。香港政府の発行する香港年報によると、香港からの海外移住者は1992年にピークを迎え、そ

の数は年間65,000人程に達した。その大半、45,000人程の目的地はカナダであったという。当時の香港の人口は約500万人。脱出者の総数は数十万人、約1割の人々が脱出したといわれる。その後急激にその数は減少し、2000年以降はほぼ1万人という数で横這いが続いている。脱出できる人は、来るべき時までにはほぼ脱出したと言えるだろう。

今、香港で声を上げている抗議者達は、脱出が叶わなかった人々ということなるのだろうか。自分が生まれた街、香港への愛情なのか。併合後に次第に広く使われるようになった、「香港人」という呼称は香港への愛着というよりも、中国本土に住む中国人と自分たちを区別するためであるようにも思える。英国の文化に触れ続けてきた香港人にとっては、情報統制のもと閉鎖的な環境にある中国本土の文化、もしくはマナーの欠如に対して、ある種の嫌悪感さえ覚えているようだ。



香港にとってはこの23年間は、その存在感を喪失しつつある23年間であった。なお、国民一人あたりの裕福度の参考として、物価等の換算を行った「購買平均単価換算の実質GDP」を人口で割った値において比較した場合、1997年当時、香港は約25,000ドル、一方の中国は約2,300ドル。およそ11倍の差が開いていたが、2018年には香港は65,000ドル、中国は18,000ドル（出所：世界銀行）、依然、香港は中国を大きく差をつけてはいるものの、その差は約3.5倍にまで近づいている。ちなみに、その値は日本は1997年当時、香港とほぼ同じ値を持っていたが、成長は極めて遅く、2017年においても約43,000ドル。つまり香港にはずいぶんと差をつけられてしまったことになる。

香港人は中国人に追いつかれることを恐れている。一部の裕福な中国人は香港に進出し、結果として香港の不動産価格は高騰した。住宅価格はこの23年間で1.5倍以上にまでなったのである。中古の50平米のマンションが、6000万円を超えるようになってしまった香港。資産を持っていない香港人は住環境に困窮している。裕福であるはずの自分たちが惨めになっていくことを感じながら、横目で中国本土からの富裕層の姿が増えていくのを見ている。すべては、中国のせいだ。彼らがそう考えてもおかしくはない。かれらの中国政府に対する反抗心は、イデオロギーだけでは語れない。嫉妬、不安。鬱積した、そういう複雑な感情が燻っているのである。

2020年1月3日

中国－平和なディストピア

「音楽、それは終わるとともに、消えてなくなってしまう。それを再び取り戻すことはできないのだ。」

ジャズの巨人、エリック・ドルフィーのこの言葉を聴いた時以来、それは自分の心に居座り続けていた。ジャズの名曲は、当時の空気感を伝えてくれはするものの、その場に居合わせていられなかつたという、無念な思いが付きまとう。だからこそ、今奏でられるものを探したいと思うのだ。勿論それは音楽に限らない。

香港で起きていること、そして中国で起きたことがある。それを自分の目で見たいということがこの旅の動機の一つであったのだが、ある意味、深圳という街はその中でも特に足を運びたい場所でもあった。深圳、それは文字通り、社会主義と資本主義の境界、前線上にある場所であり、急激に成長する現在の中国の象徴だ。体で感じられる現在進行形の歴史。今、奏でられているもの。私は深水埗から日帰りで深圳に向かうことにした。



深圳を訪れるのは今回で二回目となる。1997年に香港を訪れた際に足を運んでいた。深圳に向かう電車の中で深圳の2020年現在の人口を確認して驚く。その数字は1,253万人。東京は2020年時点で約1,400万人であるから、それに届きそうな勢いだ。中国における都市人口のランキングにおいて、深圳は第5位。一位の上海、約2,500万人を筆頭に、北京、広州、天津、深圳と続き、その後に、武漢800万人となる。総人口10億と言われる中国の規模にあらためて驚く。いくつもの国を飲み込んだかの様だ。東京規模の街がいくつもある。その規模が、中央集権体制を肯定する根拠になっているのだろうか。深圳は1996年当時でも人口は500万人。それが2倍以上に急激に膨れ上がったことになる。ファーウェイ、テンセントをはじめとするIT企業の本社が集まる深圳。ITの街に生まれ変わったのだ。

イミグレーションの列で待っている間、携帯電話のローミング設定を行う。スマートフォンに表示される中国キャリアの名前。それを選ぶ。それがどんな意味につながるのか、この時点では考えが及んでいなかった。

深圳の街を眺めるとき、曇りな記憶を辿ると、ビルはありつつもずいぶん広く殺風景な場所であったと思うが、今日の前にあるのは紛れもない巨大都市だ。ただ、その空気感は香港とは異なる。この20年間で中国自体とともに急速に発展した深圳。それは香港はある意味対照的だ。1843年、アヘン戦争の勝利により英国の植民地となった香港は177年間という混沌を背負っている。なによりも、香港の建物が如実にそれを表している。細切れの土地に長く伸びるペンシルビル群。それ

が香港の風景だ。一方、深圳のビル群は比較的真新しい。その雰囲気は東京に近いと感じる。東京の建物の平均使用年数は30年弱。深圳における急激な発展で考へると、同じぐらいの築年数のビルが多い。故にその景色も近くなるのだろう。

膨大なビル群の隙間にある食堂、そこにあるメニューの金額は割高な香港に比べると驚く程安く、そして旨い。つい多めに注文してしまう。中国人の食文化は深い。それは大衆レベルにも浸透した深さだ。食材毎の調理方法にも拘りがあり、あらゆるものを見事の形で調理する。香港人をはじめ、中国人には西洋料理に否定的な感情を持つ人々が多いそうだ。みんなの食べているのが可哀そう、中国人は諸外国の食文化をそう見ているのだ。経済的な繁栄のもとでの物価の安さ、そこはある意味で楽園だ。ドル換算で比較すれば中国のGDPは米国に次いで世界第二位だが、国ごとに異なる物価を勘案した購買力平価で換算すれば中国のGDPは2015年に米国を抜いて世界一位になっている。安い物価の上で繰り広げられる大きな経済活動というわけだ。

街を歩いても、今の中国は本当に東京と大差がないように見える。ショッピングセンターに集まる人々の表情は平和だ。これが窮屈な監視社会なのかと疑いたくなる。監視国家という中国のイメージは、ある意味過剰につくられたイメージなのではないか。それが、中国の台頭を外交的にも経済的にも抑え込みたい勢力の印象操作だとしたら。こうして実際に現代の中国に立っているとそんな疑念さえ浮かんでくる。その視点に立った時、民主化さえも果たして盲目的に善であると考えてよいのだろうかとさえ思うのだ。

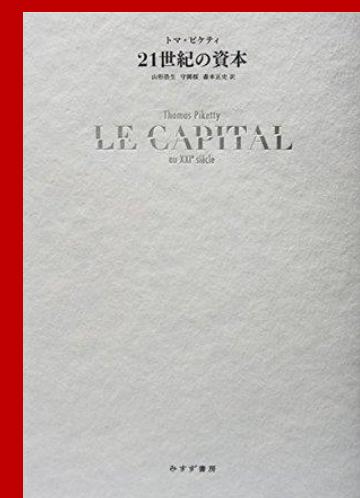
民主化という甘美な言葉に隠されているもの。国家と個人、どちらを大事に考えるかと問われれば、ほとんどの人々は個人であると応えるだろう。国家とは国民を助けるためのシステムであるべきなのだから。時に、独裁国家に対しては、一部の権力者の利益のために、他の国民が犠牲になるという構図が描かれる。我々が中国に対して抱く姿も同様のものだ。ただし、民主主義を資本主義として読み替えると様相は異なってくる。これらは表裏一体であるとも言える。資本主義は、お金という恣意的でない価値体系を持つが故に、どのような背景を持つ人物であっても、金持ちになるという選択肢が開かれているように見えるが、実際は、トマ・ピケティの著書『21世紀の資本』にあるように、金持ちはよりたやすくお金を稼ぐことができるという分析結果が出ている。これは事実上、社会を勝者側と敗者側に分断する。しかも、IT産業が生み出す勝者は少数に留まる。自動車産業のように、製品を作るために多数の労働者の力が必要になる産業とは構造的に異なるのだ。現代の資本主義社会において多数の敗者の犠牲の上に、少数の勝者がいるという状況は、独裁政治がもたらすものと本質的に大差がないのかもしれない。

一方で、この観点で「民主主義と大差がない」となる独裁政治においては、民主主義にはないメリットが存在する。一部のエリートが正しい判断を迅速に実施することができるという、選民思想的なメリットだ。それは中国の様に短期間に国家を成長させる重要な要因になるのかもしれない。シンガポールに目を向ければ、そこはある意味、独裁国家ではあるものの、経済的な繁栄によって悲劇の国民と

いうイメージは払拭されている。

逆に言えば、近年の民主主義国家の迷走ぶりは顕著だ。2016年の米国のトランプ大統領選出、そして2018年の英國国民投票によるブレグジットの可決。国民の感情を刺激する政策は実際に票を集めることができる。専門家でない多数の国民の判断は感情により左右されやすい。移民に職を奪われるような恐怖、エリートに搾取される恐怖。それらの感情に判断されることが国の発展の足枷になることはないのか。

この様に、深圳への再訪は民主主義への絶対的な信頼を揺るがす体験から始まった。ただし、それはすぐに、中央集権国家の行う情報統制を感じさせる体験へと変わった。



違和感 — 狂った地図

深圳で、あるメッセージを受け取った。面識のない3人に対して羽田空港で送ったメッセージへの返答。既に届いていた最初のものは舞踏家の彼女からの返答だった。それに加えてもう一つの返答が届いたのだ。ミシェルという名のその人物は、フェイスブックの写真にも抗議者の姿をしたジンジャーブレッドボーイ・クッキーの写真を使っていたので、間違いないと抗議者の活動に関っていると思われた。その人物が、会ってくれるというのだ。深圳の街を歩きながらも、舞踏家の彼女とメッセージを交わしている中、ミシェルの話題に及んだ。舞踏家の彼女はその人物と面識がある。それは、私がフェイスブックの投稿を辿って3人を選んだから、自然なことではある。

「確かに彼女はもっとインサイダーよ。彼女は有名人。元日の抗議デモ行進でも、主催者側でマイクで呼びかける役をやっていたはず。」

彼女？恥ずかしながら私はその人物は男性だと思っていた。名前も男性としても通じる名前だ。メッセージのやりとりだけでは意外に分らないものだ。そんなメッセージを舞踏家の彼女とやりとりをしていた後、今、深圳に来ている旨を伝えた。

「何ですか!? あなた今、深圳にいるの? もうこれ以上、抗議活動の話題をしては駄目。メッセージも可能な限り削除して。最近は、中国政府が香港の抗議活動に神経を尖らせているの。入国審査の際、疑

いのある人物はスマートフォンを取り上げられて中身をチェックされる。何時間も拘束されることがあるわ。抗議者の中には何人もそんな目にあっているから、私たちはこここのところずっと深圳に行くことは避けているのよ。」

そっとした。入国審査時にスマートフォンの通信キャリアを切り替えたことを思い出した。ここはITの街、深圳だ。AIによる通信検閲はどこまで実現しているのだろう。AIでなくとも、特定のキーワード、例えば「抗議デモ」といったものでアラートを上げることは難しくはないようと思える。アラートの上がった人物を自動的に追跡して、通信基地局等の情報からその位置を特定する。その人物が出入国審査を通る際に、検査官に注意を促す、そんな事も不可能ではないような気がした。もしも、中国共産党が本当に、香港の抗議デモが中国本土に拡散することを恐れているとしたら。どこまで本気を出して、それを食い止めようとしているのか。

私は、スマートフォンの中から、フェイスブックのメッセンジャーアプリ、香港で抗議者達のコミュニケーション手段としてインストールした「テレグラム」、ドイツの友人と連絡をとっている暗号通信アプリである「シグナル」等、抗議活動に関するメッセージをやりとりしていた諸々のアプリを削除した。書籍等、抗議活動に関わるものを探してきていたことは幸運だった。

一転して、平和に見えた景色が不穏なものに見えてくる。よく見てみると、Google Mapの位置表示がおかしい。中国本土で禁止されているアプリは多数ある。Google Mapは使っていると思っていたが、位置情報が不正確となっているのも規制の一環なのか。Wikipediaによると、中国国内では通常のGPS信号の利用は非合法となっているとのことだ。中国国内で利用可能なGPS信号はランダムに誤差を付与された、通称「火星座標系」と呼ばれるものであり、これにより500mほどのずれが発生しているようだ。中国産の地図アプリ、百度Mapを使えばそのずれは解消することだが、なぜだか大量の通信が発生するとの情報がある。監視されるということなのだろうか。中国政府によるこの様な制限は、安全保障上の理由のことだ。

米国のGPS衛星は、紛争等、有事の際には特定地域における利用を停止させるこ

とができる。すなわち、米国のGPSへの依存は軍事的な衝突の際に致命的な弱みとなり得る。それが中国がGPSに制限をかける理由の一つである。折しも深圳を訪れたその一週間程前、中国は自国のGPS衛星ネットワーク構想「北斗」を発表していた。米国依存からの離脱。中国は米国との対立を前提とした道を歩み始めていた。その道は、中国に依存する国家を増やし、中国自体の統制力を増大するというものだ。中国の掲げる一帯一路。それは米国に対抗する国家群をまとめ上げることに他ならない。GPS、そして通信規格5G。それらはその手段なのである。そしてその新たなGPS衛星ネットワークと5Gの連携を推進するための開発拠点が、人口にして深圳に続く中国第6の都市、武漢だ。香港に滞在している間に、武漢の感染症をめぐるニュースは少しずつ現れてはいたが、その後の展開の大きさを予想することは、まだこの時にはできなかった。



深圳から香港に戻る際の出国審査。パスポートの読み取り機が正常に読み取ってくれない。アラーム音を聞いてか、担当者が駆けつてくる。まだ20代の若者だ。不安は本当に的中してしまうのだろうか。舞踏家の彼女とのやりとりで交わした抗議デモに関する活動、抗議デモのインサイダー

であるミシェルとのアポイントメントの情報。それらはアラートとなって、出国審査を足止めすることになるのか。担当者がパスポート等を検査する。担当者の若者が述べたのは、この端末は調子が悪いので別の端末を使ってくださいとのことだった。

彼らは、共産主義国家の中の威圧的な役人ではなかった。西洋の基準でも違和感のない紳士的な対応。一方的に恐れていたのは自分だけだったのか。香港との境界となる川を望む景色は、黄昏時の淡い色彩を帯びていた。穏やかなこの景色に漂う、検閲の

気配。それは日本や香港を含む西側諸国から見た誇張なのだろうか。あるいは実際の、平和なディストピアということなのだろうか。



穏やかな抗議集会

— ショッピングモールの上映会に集う人々

深圳の福田イミグレーションを通過し、香港に戻る。足早に向かう目的、それは、redditに記載されていたイベント、抗議者たちの活動の記録映像の上映会に参加することだった。遅れたくない一心で、はやる気持ちを抑えながら会場、太子駅付近のショッピング・モールに向かう。現地では、予定の時刻を過ぎていたが、まだ始まっている雰囲気はない。

ショッピングモールの広場に設置された簡易的なスクリーン。その付近に集まっている若者達。おそらくは20代前半。大学のサークルのような雰囲気で準備を空埋めている。声をかけると、ああ、もう少し待って、というような軽い返答。そこには深刻さはない。和気あいあいとして、仲の良い友人同士集まっていることを自然に楽しんでいる。私が日本人だと分かると、日本語を勉強しているという若者が少し照れたような仕草で、日本語で話かけてくれる。あと30分ぐらいかかるから待っていて欲しいとのこと。彼らは、楽しんでいるのだ。抗議活動という言葉から想像される深刻さは、その先にある人々の生活を覆い隠していたが、その生活は当然、存在する。

人間は共通の敵のもとに身を寄せ合う。それは意図を超えた本能の領域だろう。そして、苦しみや恐怖とは常に相対的なものだ。大事なものを失う時や、自分にないものを他人が持っていることを直視するとき、それらの苦しみは激しく燃え上がるが、同じ境遇のもと身を寄せ合う仲間がいると、苦しみは希薄化される。そこはある意味、居心地の良い場所なのだ。若い彼らがそうやって集まっている空間は、彼らに自然な高揚感を与え、その帰結としての多幸感を、彼らは味わっている。





しばらくして、上映が始まる。そこで現れるものは、再び記号となった抗議活動だ。スクリーンに映し出されるシリアルスな世界。スクリーン上に現れたその世界と、自分が今、間近で感じていた空気感との差異をあらためて感じる。記号と、空気。書を捨てて、街に出る事が時に必要なのだ。

突然、映像が止まる。ざわつく運営者たち。しばらくして一人が、観客の前に立ち広東語で説明を始める。言葉は分らないが、おそらく、それほど深刻ではない何らかのトラブルがあったようだ。私はふと周りを見渡す。自分の隣に座っていた5人程の若者。おそらく20歳前後の友人同士なのだろう。4人の男性と、おそらくはそのうちの一人のガールフレンドのようだ。彼らのうちの一人に、今の説明の内容について英語で尋

ねてみる。どうやらバッテリーに問題があったようで、対処中なので暫く待っていて欲しいとのことだ。ついでに聞いてみると。君たちはどうやって知り合った仲間なの?

「僕たちはスケートボードが好きで集まつた仲間だよ。元旦のデモにはもちろん参加した。大きなデモだったね。だれど、最大というわけじゃない。6月のデモは200万人だった。僕たち抗議者は警察の取り締まりに対抗するために、明確なリーダーを決めないようにしている。でもそれは組織化できていないわけじゃない。リーダーがいなければ組織化は難しくなる。だけれども僕たち香港人は行動できている。それだけ、みんなの思いが強いってことだね。」

スケートボードの延長としての、抗議活動。ストリートカルチャーとしてのマインドでその繋がりを語ることもできるのかもしれない。すなわち、体制に取り込まれずに、自分たちの世界を楽しもうとする思想だ。けれども、そんな理屈が空虚に感じるくらい、彼らの世界は純粋に思える。クールであることの当然の帰結として、今ここにいる。そう語っているかの様だ。

逃亡犯条例案への反発に事を発する今回の抗議デモにはリーダーがない。メディアは、抗議デモのアイコンとして、雨傘運動を率いたジョシュア・ウォンや「学民の女神」、周庭（アグネス・チョウ）を前面に出させているが、実際のところ彼らへの求心力はすでにないと言われている。雨傘運動の様な内部分裂を起こさせてはいけないという思いも強いのだろう。リーダーに任せるのではなく、徹底した分散。現在の抗議派のスローガンは、「兄弟爬山 各自努力（兄弟よ、皆夫々に山を登ろう）」というものだ。

逆の傍らにいる年配の男性。どうやら一人でこの上映会に来た様だ。待ち時間に手持無沙汰にしている様子であったので、声をかけてみると。一人暮らしの老人だ。自転車で30分ほどかけてやってきたらしい。以前は文房具を扱う会社で営業職をしていたそうだ。子ども達はとっくに自立している。今回の抗議活動はリーダーを不在とした上で、むしろ高齢者を含む様々な人々を受け入れる間口を広げた事にもなっている様だ。その老人は、英語は片言ではあるけれど、日本人である私との会話を楽しんでくれている様だった。

「警察、良くないね。どんどん酷くなる。無茶苦茶だから、私は抗議するよ。デモにはなるべく行くようにしているよ。」

孤独な老人、学生、そしてスケートボーダー達。抗議活動は、老若男女を受け入れ、共通の目的のために彼らを暖かい絆でつなぎでいる。それは社会の文化の一部として定着を始めているように見える。中国政府は抗議活動の長期化により、抗議者達が自分たちの無力感に苛まれ、活動自体に飽きて、一連の抗議が収束することを期待しているのだろう。一方で参加者達はある意味、抗議自体を楽しんでさえいる。それは個人主義といわれる香港の市民に、集まり、身を寄せ、目的に向かって結束するという甘美な体験を提供する。それは、社会の一部をなす機能、文化なのだ。

夜更けのサミット —中国、アメリカ、ロシア

ドミトリーの夜。数人の客がビールを飲んで話している。中国人の若い男女、そしてアメリカ人の女性。ドミトリーとは、旅の肝要を人との接点に求める人種の宿り木だ。

中国人の彼は、建築を学ぶ学生。ウェーブをかけた髪、お洒落な眼鏡。自分の持つ中国人のイメージとは少し異なる、垢ぬけた若者だ。写真に興味があり、香港には撮影旅行を兼ねた旅で来たのだという。意外な程、日本人の芸能人の話に詳しい。中国から日本に訪れる観光客は、東京に溢れている程だけれど、思い返してみたらその観光客と話す機会は程んどない。当たり前だけれど、彼らは日本に興味を持ってくれているのだ。以前、中国の富裕層が日本の文化への関心を薄めつつあるという記事を読んだことがある。日本はすでに中国の目指す文化的な憧れの地ではなくなっているという趣旨だ。ここ数年、私は台湾、韓国等への訪問が続いたがその際に感じるのは、日

本が優れているという感覚が間違っているという事実だ。アジアの若者は日本人の若者と同じく、洗練されたデザインに惹かれ、上質なスペシャルティ・コーヒーを飲みながらカフェで彼らのやりたいことに思いを馳せる。当たり前のそんな事実も、現地に行かなければ本当の理解には及ばない。そんな彼らが、日本に興味を持ってくれているのは、当たり前ではなく、むしろ有難い事の様に思えてくる。

香港のデモも見に来たのか、とその中国人の彼に聞いてみる。舞踏家の彼女によれば、ここはイエローのドミトリーだ。それを意識して集まった旅行者である可能性はある。彼の返答は、香港デモは旅の趣旨ではないとのこと。彼から見ると、中国化を拒む香港の抗議派の人々がどう映るのだろう。自分の祖国を拒絶されること。彼の持つはずの感情に興味が沸いた。

「中国政府がいいとは思っていないよ。あまり表立って口にはしないけどね。でも僕たちは、特殊な環境にいることは自覚している。自分たちが受けてる教育も、メディアの報道も、政府の意向がかかっていることを理解している。そして僕たち自身がそれの影響から逃れられているとも思っていない。僕たち中国人と話す際には、僕たちが偏った思想を持たざるを得ないという前提を持っておくことをお勧めするよ。」

そんなことを笑顔で話すのである。そして僕はかつて読んだある記事を思い出した。中国人が日本人を哀れに思っていること。それは、あまりにメディアや政府を信じすぎていることだ。政府やメディアを批判はするものの、その根底には日本人がそれらに期待し、信頼している一定の領域がある。中国人は、日本人の持つその領域が危ういと感じるのだ。

それは私が香港に聳え立つペンシルビルを眺める際に感じる危うさに似ているのかもしれない。そこに住む人々が当たり前だと思っていることは、そこを訪問する外国人から見ると、不安に思える景色であること。安全基準の違い、地震の頻度の違い、そして、政府への信頼の違い、それらが違和感を感じさせる景色をつくる。国の体制、権力の所掌する範囲、政府の行動についての過去の出来事。その前提が異なるからこそ、人々の意識は国によって、時に大きく異なる。

る。あまりにナイーヴに過ぎるように見える日本人への警告。そんなんじゃ、簡単に操られちゃうよ。

そして彼はこう付け加えた。

「中国政府に問題があるかどうかはともかく、実際に中国は大きく成長した。その恩恵を僕達中国人が受けているのも事実。今の政府が国を成長させられない政府でなくてよかったと思うよ。」

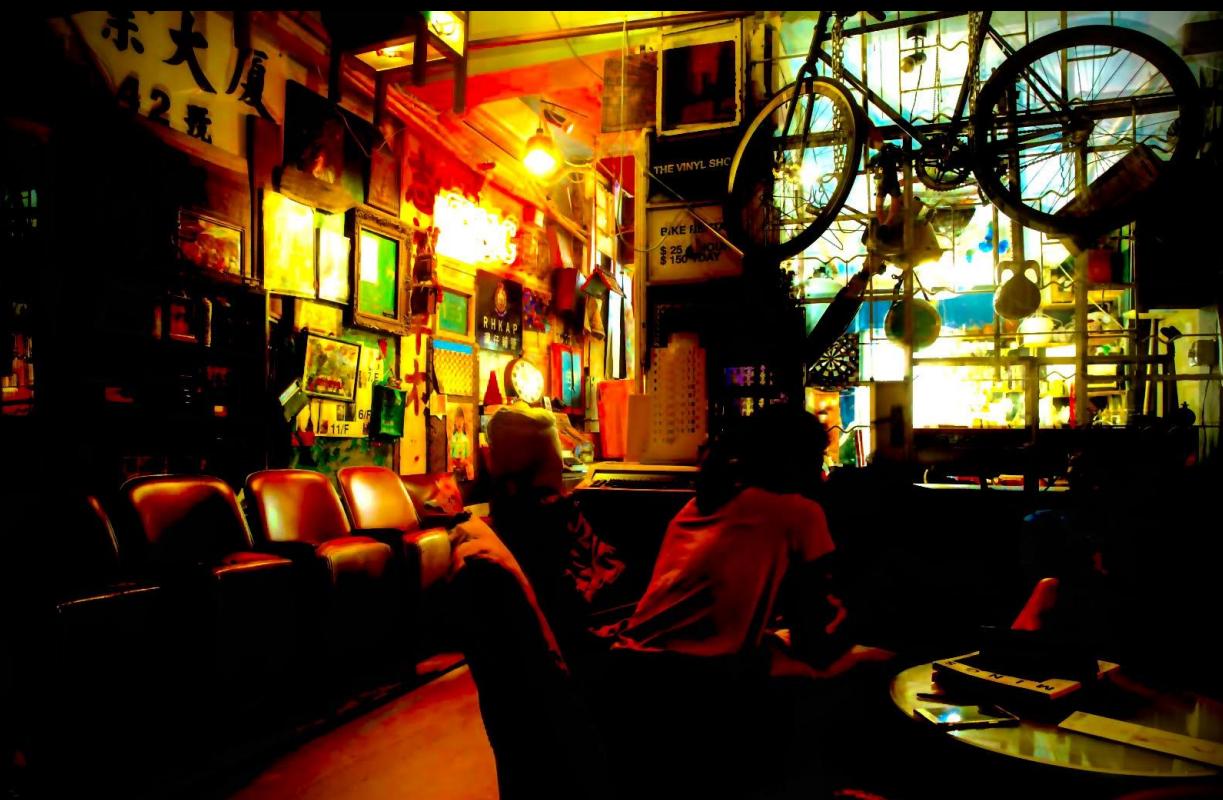
国を成長させられない日本政府。私たちは憐れみの対象だったのだ。

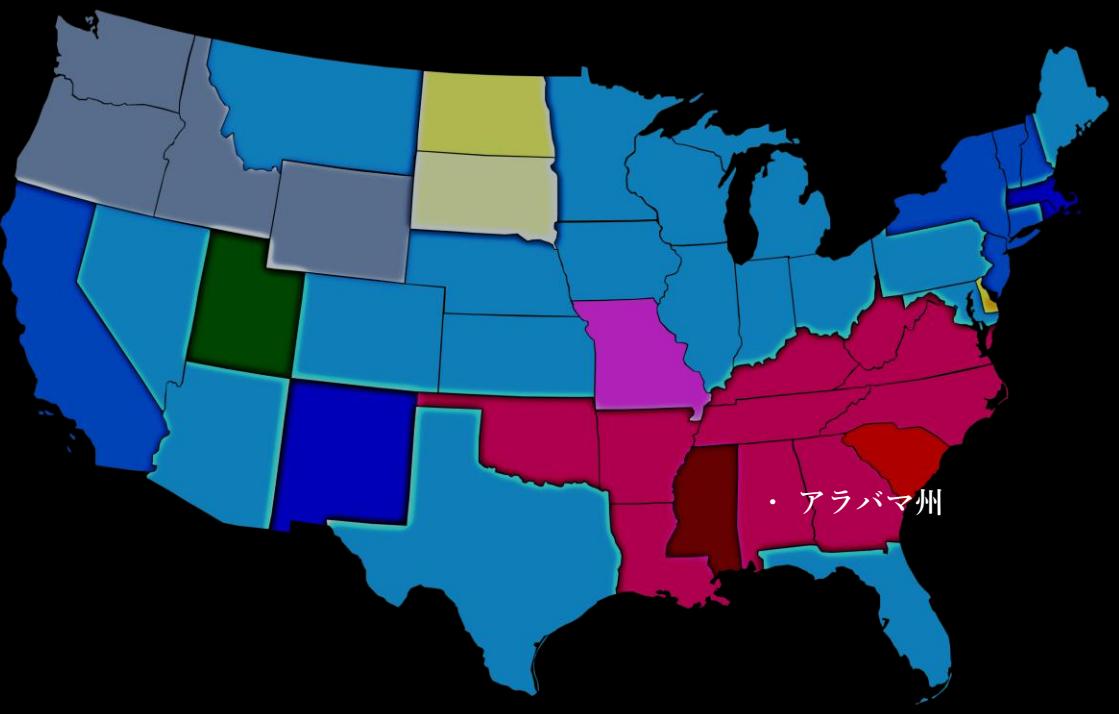
アメリカ人のその女性はアラバマ州生れだという。アメリカで満足のいく仕事が見つからないから、今は香港で英会話教師として働いている。引っ越しまでの少しの間、このドミトリーで過ごしているのだ。

「仕事がないのよ。40代の女性はアメリカではそんなもの。香港はいいわね。エキゾチックだけど、きちんと西洋的もある。」

そして小声でこう言うのだ。

「でも中国はダメ。クズみたいな子どもばかり。大人もダメ。まともなじやない人ばかり。」





偏見とは、知らないうちに自分の思想に巣くうものだ。誰もそこから逃れることは困難だ。そして、自分はそんな偏見は持っていないと思い込みがちだ。自分は正しく判断しているのだと。それは私自身への戒めでもある。あからさまな偏見を目の当たりにして、そんな思いが心をよぎる。そして、思い当たる。自分はアメリカ内陸部の人とかつて話したことがあっただろうか。訪れたことがあるのは、西海岸、東海岸の都市ばかりで、所謂、アメリカにおける民主党の支持者、リベラル層の多い地域ばかりである。日本にいる中で目に触れる米国メディアはほぼリベラルだ。アンチ・特朗普。そして無宗教で、都会的だ。それは、米国的一面でしかないことにどれだけの日本人が意識しているのだろう。

あれだけアンチ・特朗普のように見える米国民がドナルド・特朗普を選出している事実に目を向ける必要がある。フェイスブックの個人情報を選挙活動に無断利用したケンブリッジ・アナリティカの事件もあるように、当時の特朗普陣営はデータの活用を重要視していた。それは、陣営自

身が特朗普が人格で人を十分に魅了できるとは思っていなかったことの裏返しであるのかもしれない。一方で特朗普の言説は過激でわかりやすく人々の耳に届いた。アンチ・エリート、世界よりも米国を大事に。移民に仕事を奪わせるな。ある意味、厚顔無恥に、メディアに現れづらい隠れた支持を得られる可能性を追求した結果の言説であるようにも思える。そして特朗普は実際に大統領に選出された。特朗普はファシストであるという意見もよく聞かれるが、データ上から支持を得られやすい言動を選んでいるとしたら、それこそ「最も民主的な大統領」であるとも言える。特朗普の発見は、メディアに現れない民衆の意見を集めれば、特朗普でも大統領になれるということだ。そして、金脈はメディアに取り残された保守派にあった。

米国の保守派、共和党支持者は主に南部、内陸部に多く、外国には興味を持っていない。そして熱心なキリスト教信者でもある。

「教会は好きよ。心の安らぎが得られるの。ここ香港でも私はよく行くわ。」

「バイブル・ベルト」

左に示す地図のうち、主に赤色の部分が示す地域で、プロテスタントの教派バプテストが多数派を占める地域。米国の中でも特に教会への出席率が高い。赤が濃いほどバプテストと答えた人の割合が多くなる。青はカトリック信者が多数派を占めた地域。アメリカ宗教意識調査 (American Religious Identification Survey, ARIS) に基づく、所属宗派の調査結果。

化してる？アハハ、本気で言ってるの！？」

取りつく島もない。進化しているというよりは、先祖がより多様な環境を乗り越えてきたということが言いたかったのだけれど。保守的な白人の根深いものに触れた気がした。白人が移民先として渡っていった南北アメリカ大陸等では、やはり白人至上主義が強いのか。ジャレド・ダイヤモンドの名著、『銃・病原菌・鉄』では、白人の成功はユーラシア大陸のように東西に広く伸びた土地の中で人間が交流しながら比較的早く文明を発展させることができたことが、白人が文明的に成功した理由であると述べている。それは遺伝的な優位に由来する訳ではない。とはいっても進化論を否定する人々には遺伝云々すら通じなさそうだ。

彼女が中国を見る目には、彼女の育ってきた社会の無意識の領域まで入り込んだ、全体主義への嫌悪感を感じる。自由の国、アメリカ。「自由か死か」と述べたアメリカ独立運動の弁護士パトリック・ヘンリーの言葉が示すもの。彼らにとって、自由の反対は不自由ではない。アメリカの起源、存在証明自体が、中央集権体制を否定するものなのだ。

「ふっ、私たちの祖先がアフリカ人ですか？アジア人やインディオの方が進

リビングに、背の高い白人が入ってきた。話をみると、彼はロシア人。フリーランスのプログラマをしながら世界を点々として暮らしているとのことだ。今はこのドミニトリーに長期滞在している。

「今日はドローンで香港の街を撮影していくんだ。」

悠々自適な生活。彼が言うには、ネットを通して、システム開発の仕事はいくらでも探すことができる。今、彼が関わっているのは、とある学術団体のWebシステムの開発とのこと。スキルさえあれば、こうやって世界中で居を移しながら生活ができる。

香港に来る前、あるドローンで撮影された映像が私の印象に残っていた。それは、サウス・チャイナ・モーニング・ポストが報じた、香港の抗議デモの爪痕を伝える映像だ。明け方の香港をドローンが飛ぶ。街には人がほとんどいない。路面に築かれた大小様々な、そして多数のバリケード。静かな映像ではあったが、それは同時に、雄弁に語りかけてくるものでもあった。人に語りかける、「景色」。それは、私が密かに目指しているものでもあった。

数値の可視化。それはグラフであったり、地図上で示されるものであったりする。それらは時に、人に新たな知見を与えてくれるが、その影響力はまだ発展途上段階だと思う。インフォグラフィックという分野では、それらデータの可視化を、感覚的に理解可能で、印象的なイラストレーションとして表現している。私は芸術と数値の邂逅をそこに見る。その数値が、あるいはデータが、芸術に裏打ちされた表現方法によって力を得て、人々の心の奥底にまで伝わる。人に伝えなければならないもの。

データジャーナリズムという分野では、その伝えるべきものの、データによる表現を試みる。私はその試みに独自の手法を使って追求したいのだ。「景色」を作り出すことで。

ドローン撮影されたその映像をロシア人の彼に見せる。デモの景色。そう、デモとは景色を作り出すものだ。その景色は参加者だけではなく、多くの人々の目に触れる。圧倒的な数の人の塊。その異様な光景こそが力を持ち、メッセージとなって人に伝わるのだ。香港に自由を。民主主義を殺させてはいけない。景色が語るそれらのメッセージ。



ドローン撮影された、抗議デモの拠点となった大学の風景
(サウス・チャイナ・モーニング・ポストより)
<https://sc.mp/2r20v>

元日のデモで、抗議者達の集まるヴィクトリア・パークの上空を飛ぶドローンを見たことを思い出した。そこで移されていたものは、デモの風景なのか、ブラックリスト作成の為の抗議者の顔画像の記録なのか。故に、抗議者達はマスクをつけ身元を隠し、香港政府はそれを妨害することで、デモの沈静化を図る。その結果の動きが、2019年10月に施行された覆面禁止法だ。それは、議会の議論を通して緊急可決する手続きである「緊急状況規則条例」を使って可決、即時施行となった。危機に瀕するプライバシー。その流れは変えられない。街角、そして建物内には多数の防犯カメラが既に設置されている。カメラの性能は上がり、1台のカメラで確認できる距離は長くなる。膨大なカメラ映像はAIにより自動的に分析される。「不審な行動」という曖昧な基準でさえ、AIは該当映像を検出することができる。もちろんそれは、中国に限った話ではない。

2012年、日本で航空機爆破予告を含む複数の脅迫事件が起きた。警察はそれらの容疑者を逮捕するが、実際はその容疑者の所有するPCが、真犯人によって遠隔操作され脅迫文が送られたことが明らかになる。所謂、ハッカーによる仕業だ。その時点で自白の供述を始めていた容疑者がおり、それらの容疑者の無実が証明さ



れてしまったことから、警察による自白強要行為が問題視されるに至った。犯人は、俄かに日本の警察の問題点を浮かび上がらせた点で社会的に注目され始め、それに乗じたのか警察に「クイズ」を出すことで、権力を翻弄するハッカーとしての自意識を増長させた。事件は、権力対ハッカーとしての様相を帯び始める。

その決着は、警察の勝利で終わった。「クイズ」の中で言及された、江の島の猫の首輪に装着されたメモリカード。江の島に設置された35台の防犯カメラが、その猫に首輪を装着している犯人の姿を捉えていた。その犯人が電車に乗り、自宅に帰るまでの間、街中に設置された複数の防犯カメラの映像が追跡され、犯人の自宅の特定に至った。現代において、張り込みや尾行は必ずしも必要ではない。こうして、記録を辿ることで、過去に遡って人々の行動を確認することができる。勝負は警察の勝利に終わったものの、既に監視社会となった日本の現実を世に知らしめることとなつたのだ。

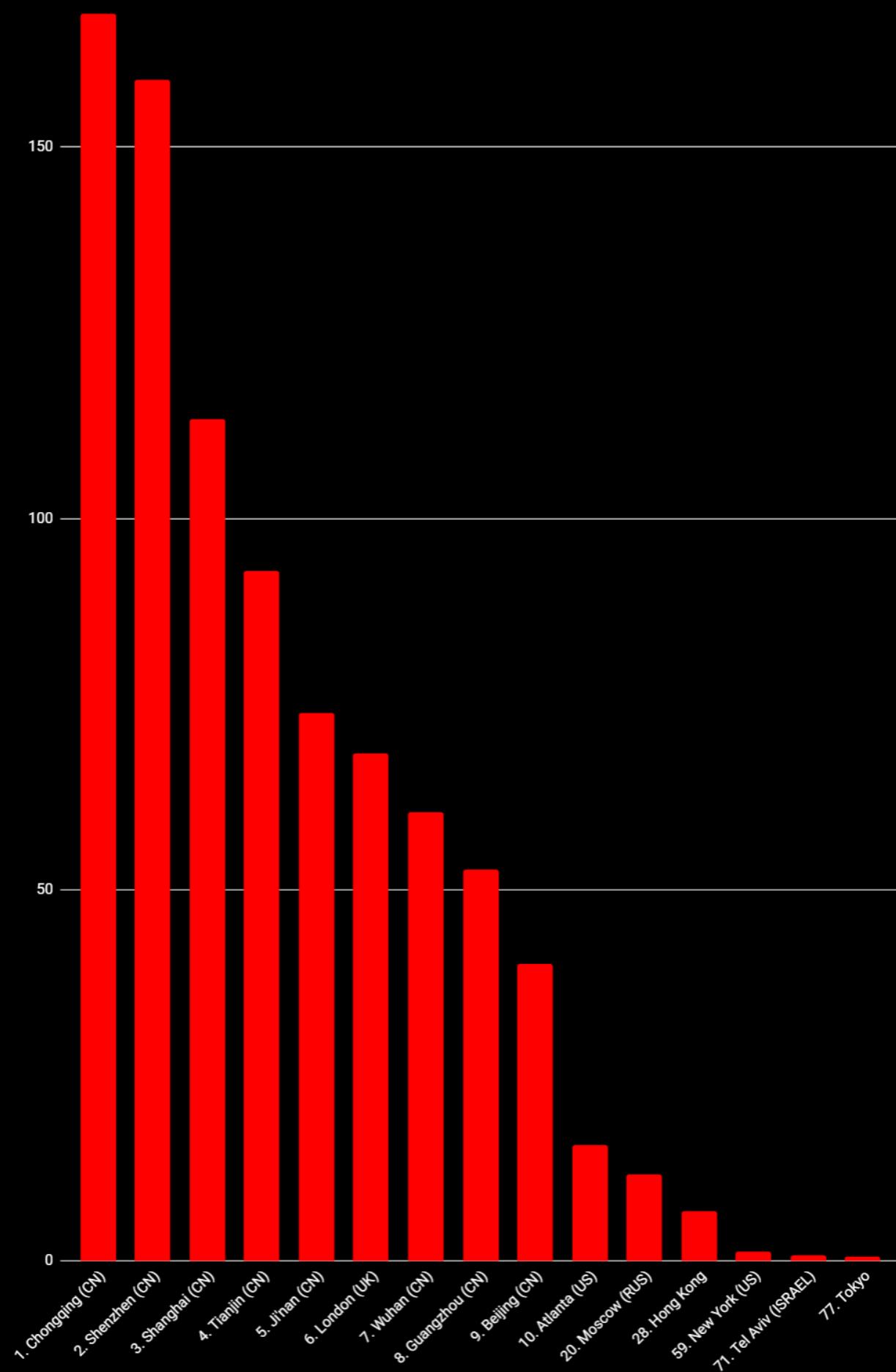
それでも、2019年時点では、東京は中国に比べて監視カメラの導入割合は極めて低い。中国におけるその監視体制は異常なまでに思える。

(左) 犯人から警察に送られてきた写真

(右) 2019年時点での各都市における
人口1000人あたりの監視カメラの数。
上位10位のうち8都市が中国。

深圳が2位、東京は77位。

[Comparitech社の調査。](#)



プライバシーの危機は権力の手中にさえ留まらない。ビジネスの世界でも、利用者の行動は記録され、営業活動に即時反映される。各種イベントで自分の名刺を差し出すと、そこに記載されたメールアドレスはシステムに登録され、メールマガジンが届くようになる。そこに記載されたいいくつかの記事。そのメールマガジンの利用者がその中の記事に興味を持って、詳細内容に続くURLをクリックする。そのURLには、その記事の配信先となったメールアドレスを特定する情報が埋め込まれており、システムはどの利用者がどの記事に興味を持ったかを特定する。利用者の情報はシステムにより分類され、必要に応じて営業担当者に通知される。かくして、営業担当者は特定の興味を持った相手に対して効率的な営業活用を行うことができるのだ。マーケティング・オートメーションと呼ばれるその仕組みは、利用者が必ずしも自分の活動情報を相手に提供していると意識していない点でプライバシー上の問題があるといえるだろう。

この例では、メールアドレスを渡した相手に情報を補足され得るという話であったが、メールアドレスを渡していくなくても、類似のプライバシー情報はビジネスに活用されている。

例えば、あなたが検索したキーワードが、記録され、売買されているとしたら。

もちろん検索サービスを提供するグーグルであればそれは可能だろう。それはグーグ

ルを利用する時点である程度意識され得る話だ。それ故にグーグルの社会的な責任と存在感は大きい。ただし、技術はそれらをグーグルに留めない。日本の企業、インティメート・マージャー社は、そのような情報を扱う企業だが、利用者の殆どはこの企業の存在を知らない。もちろん、彼らにプライバシー情報を提供しているという意識をもっていない。彼らは、どの企業が、どのようなキーワードでWeb検索をしているのかといった情報を顧客に提供する。顧客はその情報をもとに、「効率的な」営業活動を行うのだ。

ロシア人の彼に、クイズを出してみた。いっていどうやって、インティメート・マージャー社は検索履歴の情報を手に入れられるのか。

「グーグルから検索情報を売ってもらうなんてことは無いんだよね。グーグルはそのようなビジネスをするには、社会的な存在が大きすぎて、すぐに問題になるだろうからね。」

彼はそう言うと、ラウンジの天井を眺めしばらく考え始めた。真夜中のドミトリのラウンジ、天井は高く、備え付けられたシーリングファンは止まっている。

「検索サイトを所有する以外に可能性があるのは、多数のWebサイトに出している広告だ。広告を表示する際に、クッキーを利用者に提供すると、複数のWebサイトをまたいで利用者の行動を捕捉できる。」



クッキーとは、Webサイトや広告等の情報を提供するサーバーが、利用者に預ける小さな情報だ。そこには、再度、同じWebサイトを訪問した際に、前回の訪問記録と関連づけるための、識別情報が含まれている。語源は不明確だが、セサミストリートのキャラクターに由来する「クッキー・モンスター」という情報交換メカニズムもあり、クッキーはこの種の情報の象徴となっている。クッキーだと言われればなんでも食べてしまうクッキー・モンスター。プライバシーの提供という代償を理解していないWeb利用者を揶揄するようにも聞こえる。

「広告を提供するWebページがどういったキーワードで辿り着くページなのかがわかられば、Webページを横断して提供される広告の提供者は、その中における利用者が使うであろう検索キーワードを推測できそうだね。」

正解だ。私は彼の洞察力に驚いた。

プライバシーの侵害に対しての、欧米社会における反発は強く、それを防ぐための大きな動きもある。2018年にGDPR（General Data Protection Regulation; 一般データ保護規則）が施行されて以来、クッキーの使用に対して、利用者の承諾が必要となった。それは、無断の情報収集と、法令による保護のつば競り合いで。インティメート・マージャー社のシステムによる利用者情報の収集は、利用者が訪問したサイトが得る利用者承諾の中にひっそりと記載されている。そこに見られるのは、鎧を削る闘いだ。

プライバシー保護への抵抗勢力は、権力もしくはビジネスということになるが、それ

らが一体となっているところに、留意が必要だ。民主主義国家が、国民主権を第一とするが故に、プライバシー保護の気運は強く、一方で中国の様な中央集権国家は、時に国益すなわちビジネスの為に、それをプライバシー保護よりも優先する。すなわち、中国は、監視国家であることと同時に、民主主義国と比較して、ビジネス上、優位な行動を取り得る。迷走する民主主義を後目に、強攻して歩みを進める独裁国家。今日、自分が見てきたものは意外な程、東京に似た世界。福田イミグレーションで職員をしていた中国人の若者は決して奴隸のようには見えなかった。そこは本当に独裁国家だったのだろうか。混乱の香港、平和な深圳。自分の価値観が揺らぐ。

そして、プライバシーが失われていくことは独裁国家がなくなっても、避けられるものではない。それは、水が流れる事と同じく逆らい難い摂理、萎むことなく膨らみ続けるエントロピー、見えざる手に後押しされる盲目の行進なのだ。

SF作家グレッグ・イーガンの小説『ディアスボラ』で出てくる世界、小さな惑星の中に組み上げられた計算機。数万年後の人類は、その中に生きるデータだ。人々は自らの意識を、それら計算機のネットワークにアップロードすることで、その世界に「移住」した。データとなった彼らは、自らを複製し、通信によって移動する。想像を超える未来の世界について語る時、現代の私たちの行く末が見えるようにも思える。人類が究極的にデータとなるのだとしたら、当然、それは計算機の制御下に置かれている。究極の監視社会、あるいは、そこでは監視と社会は同じ意味になってしまうかも知れない。

そこに至る道において、監視という切り口で起きる世界の変化とはどのようなものになるのだろうか。

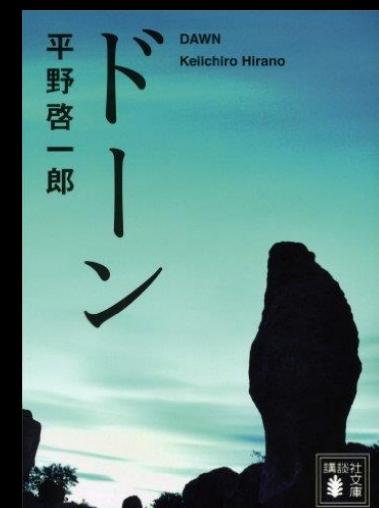
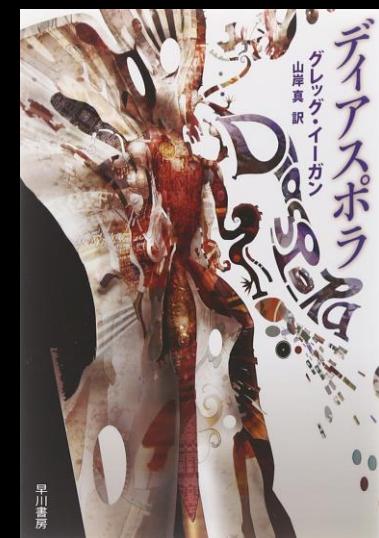
芥川賞作家である平野啓一郎氏の作品『ドーン』に描かれる、監視カメラ映像の検索システム「散影」。その作品の中では、国家が持つ監視機能の重大さに警戒した市民が選んだものは、「監視機能の民主化」だった。店舗に設置された民間の防犯カメラの映像を、民間の手によって広く公開し、誰もがアクセス可能にしたのだ。検索窓に人名を入れると、その人物を記録した防犯カメラの映像が一覧となって現れる。いつ、どこで、彼が何をしていたのか。それが簡単に検索されてしまうのである。一見、逆説的に、人々が自らを苦しめているように見えるが、それは国家にのみ力を与えるのではなく、全ての人々にその力を与えることで、あらたな平等の極地に辿り着くのだ。プライバシーの崩壊を避ける唯一の手段は、プライバシーの解放だという訳だ。

そこにヒントがあると私は思う。プライバシーの崩壊とは、情報の不公平な偏在によって発生する問題だ。得体の知れない國家権力が私たちのプライバシーを覗いている。それが問題であり、もしも、そこで覗き見をしている人自身のプライバシーも公開されているのであれば、その問題は薄められるのではないか。すなわち、覗き見の行為が確実に咎められるが故に、覗き見の行為は抑止される。それは国家権力であっても、個人のプライバシーを覗き込む行為が許されない以上、「できるのだけれど、やってはいけない」という扱いにするのだ。

デモ隊の上空を飛ぶドローンが記録した画像をもとに政府が国民に「反政府者」とい

うラベルをつける、その行為が社会に露呈した時、それは権力者のスキャンダルとなって権力者を痛めつける。それを恐れる権力者。その結果、プライバシー侵害が抑止される。すべての解決にはならないかも知れないが、一定程度の着地点にはなるのではないか。

そのような、誰もが偽れない社会がいつか訪れる。窮屈な世界かもしれない。けれども意外に人間は適応するのではないか。翻って、今を見つめればそこがいかに未開の状況であるかが感じられるだろう。



元日のデモ、その参加者数として主催者側が発表した100万人超という数値。そして、警察の発表した6万人という数値。その場に居た自分にとっても、見えていたのは局所的な人ばかりだけだ。行進の先、人影が作る波はどれぐらい続いていたのだろう。正確な数を数えることが困難であることを利用して、デモの規模を過小発表しているとしたら。偽りができなくなったとき、数値を改めるのは、抗議者側か、権力者側か。

ロシア人の彼は興味深そうに話を聞いてくれていた。そんな彼に聞いてみる。デモの参加者を数えるよい方法はあるのか。

「監視カメラの画像とかを使うのかな。でも参加者はそれらの映像にアクセスすることは困難だから、今回のように反体制を主張するデモの為に正確な数を知ることは難しいね。」

正確な数を示すことができないことは、抗議者達にとって深刻な問題だ。正確な数を示す貴重な機会が先日の区議会議員選挙だったのだ。それ故、抗議者は必死で選挙に参加し、その一方で当時のメディアは体制側は選挙中止の口実を探していると報じていた。もしも、政府によってその貴重な機会が失われていたとしたら。いや、そもそも、そんな限られた機会しか与えられていない事自体が、るべき姿ではないのだ。

「景色」をつくるデータ。そのデータはどうやって入手するのか。デモに参加した参加者達の正しい数を数えることと、データによってつくられる「景色」は、こうして繋がったのだ。

私は彼に話す。自分が居合わせたデモの参加者数が不明であることを知って以来、ずっと頭の片隅に残り続けていた課題。匿

名の投票システムを作れないだろうか。参加者による不正な水増しもできない投票技術が必要だ。その技術自体が、数え上げられた世論の正確さを保証する要になる。

彼は再び上を向いて考えていた。そして少し頭を振りながら答える。

「簡単じゃないね。同一人物による複数の投票を避けるためには、個人の特定が必要だ。一方で、特定された身元が、政府にばれてしまうリスクがあるのであれば、参加者はそのシステムを使おうとはしない。抗議者達が一番気をつけているのは、顔を隠して、参加の証拠をカメラに撮られないようにすることだからね。それに、抗議デモの様に、反対派だけが参加して投票することになれば、投票の中身ではなく、参加すること自体が匿名化されなければならない。」

そう、難しい課題だ。ただ、この「匿名の投票」というテーマ自体に辿り着いたことが私にとっては実りあるものだった。アカデミックな研究もありそうだ。

「面白いテーマだね。僕たち技術者が民主社会の実現に貢献できる機会だ。」

彼も少し興奮している様子だった。気が付けば、夜は更け、ラウンジで話しているのは私たち2人だけとなっていた。抗議者達が民主主義の存続を訴える香港で出会った、ロシア人と日本人の技術者二人。奇妙な連帯感が生まれていた。彼はこう話してくれた。

「明日、君を連れていきたいところがあるんだ。ここ深水埗にある24時間開いているカフェだよ。抗議者達が集まって話している。君の話を興味持ってくれる人が居ると思うんだ。」

そのカフェの名前は「Dog 99」。私は連鎖的に繋がっていくこの幸運に感謝した。

『香港、深圳、そして武漢 — 抗議デモから繋がる民主化、その行方』第3集
第1.0版
2020年6月20日